

研究・調査報告書

| | | |
|--|---------|-------------|
| 分類番号 | 報告書番号 | 担当 |
| A-110 | A - 273 | 13-070 |
| 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 | | |
| 題名 (原題/訳) | | |
| Alcohol and cardiovascular health: the dose makes the poison...or the remedy. アルコールと心血管病リスク : 量により毒にも薬にもなる | | |
| 執筆者 | | |
| O'Keefe JH, Bhatti SK, Bajwa A, DiNicolantonio JJ, Lavie CJ. | | |
| 掲載誌 | | |
| Mayo Clin Proc. 2014 Mar;89(3):382-93. doi: 10.1016/j.mayocp.2013.11.005. Review. | | |
| キーワード | | PMID |
| 大量飲酒、早期死亡、循環器疾患 | | 24582196 |
| 要 旨 | | |
| <p>軽・中等度の習慣的飲酒（一日あたり上限が女性1ドリンク、男性1-2ドリンク）は、総死亡・冠動脈疾患・糖尿病・心不全のリスク低減と関連している。しかしそれ以上の飲酒量は循環器疾患のリスク上昇と関連している。実際に米国においては、喫煙・肥満に次ぐ早期死亡原因の三位が過剰飲酒である。大量飲酒は（1）“可逆性の”高血圧の原因として多く、（2）非虚血性拡張型心筋症の原因の約3分の1を占め、（3）心房細動の原因として多く、（4）脳卒中（出血・梗塞ともに）のリスクを著明に上昇させる。</p> <p>飲酒の危険・受益比（リスク・ベネフィット比）は若年者において高い（すなわち不利益が利益を上回る）ようである。この世代は過剰飲酒・短時間大量飲酒が多く、急性中毒による好ましくない結果をもたらしやすい。事故・暴力・人間関係上の争いがある例である。実際、15-59歳の男性ではアルコール乱用が早期死亡の主な危険因子となっている。様々な飲酒様式のうち、軽・中等度の飲酒（理想的には夕食前か夕食中の赤ワイン）が、循環器疾患の低減と最も強く関連している。しかしながら医療者は非飲酒者には飲酒を勧めるべきではない。その理由は、非飲酒者を対象にした無作為試験で何らかの利益を示した報告はほとんどなく、疾病リスクが低いと思われる個人であっても飲酒による不利益の可能性は否定できないからである。</p> <p>本総説で吟味した研究はPubMedにより1997-2012年の15年間に発表されたものうち以下のキーワードを用いて収集した、“alcohol”“ethanol”“cardiovascular disease”“coronary artery disease”“heart failure”“hypertension”“stroke”“mortality”。そのうち研究の質と目的に優れ、方法が適切であると考えたものを採用した。</p> | | |